V 南米
[ブラジル]

1. 一般経済の概況

ブラジル経済は、94年の経済安定策であるレアルプランの実施後、急速にインフレが収束し、内外の需要増加に支えられて安定成長を持続したが、97年のアジア経済危機による影響で、98年の実質国内総生産（GDP）の成長率は0.2%と低迷した。さらに、98年のロシアの通貨危機を端緒とする新興国の危機がブラジルにも波及し、99年１月には自国の通貨レアルの切り下げを実施した。このため99年はマイナス成長が予想されたが、農業部門が好調だったことなどから1.1%のプラス成長となった。

また、通貨の切り下げによりインフレの再燃も懸念されたが、99年の消費者物価上昇率は8.4%と、当初の予測をはるかに下回る水準となった。

貿易収支は、レアルプランの導入による影響で輸出製品の競争力が弱まったことから、95年以降著しく悪化していた。99年は、輸出額に比べ輸入額が大幅に落ち込んだことから、貿易赤字は前年より53億ドル減少して12億ドルとなったが、通貨切り下げで期待された大幅な黒字への転換は図ることができなかった。また近年、失業率（主要都市部）は上昇傾向で推移しており、99年は7.6%となった。

表１　主要経済指標

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
実質GDP成長率（%）	4.2	2.7	3.3	0.2	1.1
消費者物価上昇率（%）	22.0	9.1	4.3	2.5	8.4
失業率（%）	4.6	5.4	5.7	7.6	7.6
貿易収支（百万ドル）	▲3,158	▲5,554	▲8,357	▲6,474	▲1,206

資料：FGV（ヴァルガス財団）

2. 農・畜産業の概況

ブラジルは、日本の約23倍に当たる８億5,100万ヘクタール（851万平方キロ）の国土を有しており、そのうち農用地面積は３億5,360万ヘクタール（95年）で、国土面積の41.5%を占めている。農業経営体数は486万戸、１経営体当たりの平均面積は72.8ヘクタールであった。

97年の農業就業人口は、1,677万１千人と全就業人口（6,933万２千人）の約４分の１を占めるほか、全輸出額のうち農産物の輸出額が４割を占めるなど、農業は国内の重要産業として位置付けられている。99年の農業総生産の実質成長率は、良好な天候要因などにより、前年の1.8%から9.6%と大幅に増加した。

表２　農場面積と農場数の推移

区分／年	1970	1975	1980	1985	1995
農場数（千戸）	4,924	4,993	5,160	5,802	4,860
農場面積（千ヘクタール）	294,143	323,894	364,853	374,925	353,611

資料：IBGE（ブラジル地理統計院）

3. 畜産の動向

(1) 養鶏・鶏肉産業

ブラジルの鶏肉生産量は、70年の21万７千トンから99年には552万６千トンと25倍に増加し、米国、中国、EUに次ぐ生産量を誇っている。また、輸出量は、米国、EUに次いで多く、99年は生産量の約14%に当たる77万１千トンを輸出した。

①ブロイラーの生産動向

99年のブロイラー生産量は、通貨切り下げによる輸出競争力の強まりを背景に、前年比13.8%増の552万６千トンと過去最高を記録した。生産量は、国内および海外の順調な需要の伸びに支えられ、拡大傾向で推移している。

②鶏肉の需給動向

鶏肉輸出量は、97年のアジア経済危機などの影響を受け、98年は前年を下回ったが、99年は通貨レアルの切り下げによる輸出競争力の強まりなどから、前年比25.8%増の77万１千トンとなった。国別に見ると、丸どりの主要市場であるサウジアラビアが21万７千トンと最も多く、パーツの主要市場である香港が10万１千トンとこれに次ぐ。

１人当たりの鶏肉消費量は、牛肉と比較し安価であることや、消費者の健康志向の高まりな

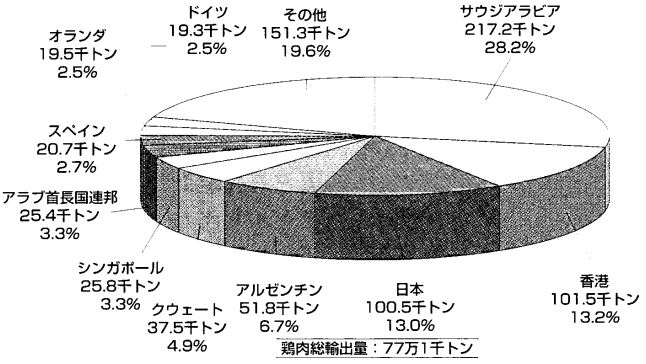
どから、ここ10年間で倍増しており、99年は29kgとなった。

表３　鶏肉需給の推移

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
ひな生産羽数（百万羽）	2,537	2,593	2,864	2,859	3,154
生産量（千トン）	4,050	4,052	4,461	4,854	5,526
輸出量（千トン）	434	569	649	613	771
消費量（千トン）	3,617	3,483	3,812	4,241	4,755
１人当たりの消費量(kg)	23.2	22.1	23.9	26.2	29.0

資料：CONAB（国家食糧供給公社）
　　APINCO（ブラジルブロイラー用ひな生産者協会）

図１　鶏肉の輸出相手国（1999年）

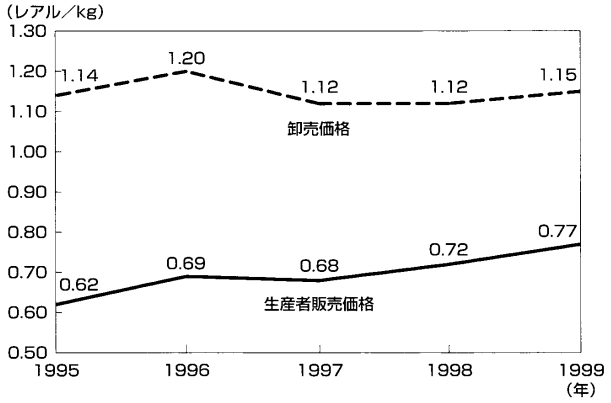


資料：ABEF（ブラジル鶏肉輸出業者協会）

③ブロイラーの価格動向

99年のブロイラーの生産者販売価格は、輸出量の増加などにより、前年比6.9%高の１kg当たり0.77レアルとなった。また、丸どり卸売価格は、前年比2.7%高の１kg当たり1.15レアルとなった。

図２　ブロイラー価格の推移（サンパウロ州）



資料：CONAB（国家食糧供給公社）
注：生産者販売価格は生体ベース、卸売価格は丸どり（冷蔵）ベースである。

(2) 飼料穀物

ブラジルは、世界のトウモロコシ生産の約５～６％を占め、養鶏、養豚などの畜産業を中心としたトウモロコシの大消費市場が形成されている。このため、近年は、国内消費量の一部をアルゼンチンなどからの輸入に依存している。

①主要な政策

ブラジルの農産物価格政策は、原則として自由競争による市場原理を尊重する方針をとっているが、農産物の販売に際して価格暴落による農家のリスクを軽減し、所得の確保を図る観点から、最低保証価格制度が実施されている。また、最低保証価格で政府が買い上げた農産物により緩衝在庫が形成されるため、これが市場価格を調整する役割を果たしている。この制度の対象となっているのは、トウモロコシ、大豆、コメ、綿花、フェイジョン豆（ブラジルの食卓に欠かせない薄茶または黒色の豆）などの主要作物である。

②穀物の需給動向

97／98年度のブラジルのトウモロコシ生産は、天候不順により前年度比5.4%減の3,019万トンとかなりの減産となったことから、177万トンもの輸入が行われることとなった。98／99年度の生産量は、前年度比7.3%増の3,239万トンとなったが、国内需要が引き続き堅調であったことから、期末在庫は142万トンとひっ迫した。99年（１～12月）の輸入量における国別シェアは、アルゼンチンが全体の65%を占めて最も多く、次いでパラグアイ（23%）、米国（12%）の順となった。

表４　トウモロコシ需給の推移

（単位：千トン）

年度／区分	期首在庫	生産量	輸入量	消費量	輸出量	期末在庫
95／96	8,996	32,405	377	35,208	608	5,961
96／97	5,961	35,703	500	35,912	82	6,169
97／98	6,169	30,188	1,765	35,000	－	3,122
98／99	3,122	32,393	900	35,000	－	1,416

資料：CONAB（国家食糧供給公社）
注：年度は原則として２～１月（98／99年度の場合は99年２月～2000年１月）

③穀物の価格動向

99年（1～12月）の生産者価格（サンパウロ州）は、トウモロコシ在庫がひっ迫したことなどから、前年比19.1%高の60kg当たり9.96レアルとなった。

表5　トウモロコシ価格の推移（サンパウロ州）

（単位：レアル／60kg）

区分／年	1995	1996	1997	1998	1999
生産者販売価格	6.47	7.37	6.68	8.36	9.96

資料：CONAB（国家食糧供給公社）

99・2000年のブロイラー生産量、輸出量とも増加基調で推移（ブラジル）

ブラジルの99年の鶏肉生産量（骨付きベース）は、過去からの積極的な技術導入により生産効率が向上したこと、99年1月の通貨レアルの切り下げで輸出競争力が強まったことなどを背景に、552万6千トンと、前年を14%上回った。また、1人当たりの鶏肉消費量は、99年が前年比11%増の29kgと堅調に推移した。

2000年に入ると、需要の減退が顕著になり、ブラジル産鶏肉の輸出価格が低下したことから、大手の処理加工業者が輸出を手控え、国内販売を強化したことに伴い、国内供給量が増加してブロイラーの生産者価格は低下した。こうした生産者価格の下落と、飼料原料の大宗を占めるトウモロコシ価格の上昇による生産コスト高というダブルパンチの状況下、生産調整によるブロイラーの価格回復が図られた。そして、生産調整が行われる中、インテグレーション資本が市場シェア拡大のための増産計画を打ち出す一方、生産量の削減を余儀なくされたのは、インテグレーション傘下ではない、いわゆる独立系の養鶏農家と中小の処理加工業者など、既に採算割れをきたしていた部門の人々だった。なお、2000年の鶏肉生産量は、前年比4%増の572万6千トンである。

一方、2000年の輸出量は、前年比18%増の91万トンと、過去最高となった99年をさらに上回った。しかし、輸出額（FOBベース）は約8億6百万ドルと前年を8.0%下回った。2000年は、アルゼンチンがブラジル産丸どりに対し、アンチダンピング税を賦課したことからアルゼンチン向けが減少したものの、EUで拡大する牛海綿状脳症（BSE）問題による牛肉需要の低迷、ユーロ安による生産資材コストの上昇などEU地域内の要因から、EU向け冷凍パーツの需要が激増した。